

介護保険からみた医療-介護 連携の工夫：事例報告

特集にあたって

今や OT の働くフィールドは、医療機関、介護保険分野、就労関係・児童といった障害福祉の分野、企業内でのアドバイザー、コンサルタント等多岐にわたっている。ゆえに、対象者の疾患や年齢もさまざまであり、人生の目標も異なる。

医療機関から退院された方々を地域（生活）の中で支えるにあたり、医療と介護が分断されていることほど無駄なことはない。せっかく医療機関で在宅生活の可能性を探り、創り、実践しても、連携が不十分な状態では、介護保険への移行時の生活課題に即したプログラム立案を遅らせることとなる。

本特集では、受け手側である通所リハ、訪問リハ事業所、訪問看護ステーション、通所介護における医療-介護連携の工夫について、事例を基に具体的な内容を紹介している。地域（生活者）側の OT がどのように活動・参加を促し、社会適応訓練を実践しているか、さらには療法士だけでは支えられない地域（生活者）を、いかに多職種を巻き込み連携を図っているかがわかりやすく述べられている。

医療機関の OT には、ぜひ、この実践を知っていただき、川上からも川下からも対象者の生活をイメージできる「連携」を期待したい。
(茂木有希子)

企画担当

茂木有希子（株式会社ハート&アート、OT）

長野敏宏（御荘診療所、医師）

山本伸一（山梨リハビリテーション病院、OT）